

# シリーズ⑨ 地域の目



株式会社かりゆしエンターテイメント

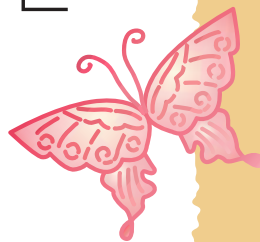
代表取締役社長

長嶺 栄子

(ながみね えいこ)

## 「アジアの架け橋を

## 目指して」



今、私は去る5月に弊社が創業記念事業として開催した「観光文化交流」アジア交流の架け橋を指して「でお世話になった沖縄在住の外国(中国、韓国、台湾、フィリピン、タイ、インドネシア)の方々にお礼を兼ねて、残暑見舞いの葉書を書いている。

イベントは「アジアは二つ」をテーマに沖縄在住のアジアの方々との交流を深め、沖縄をアジアの結節点、という趣旨のものである。

国際交流というと、どうしても海外に出向いたり、あるいは外国からお客さんをお招きしての交流というイメージがこれまで強かった。しかし沖縄には103か国、8501人の外国人が住んでいる。その中でも、

アジア26か国の人々が5037人も私たちと一緒に沖縄で生活をしていることに目を向けると、これまでもは違ったもつと普段着の国際交流ができるのではと思った。

そして「アジアの結節点」は、日常の友だちづくりから始めるべきでは、との考えがこのイベントの柱になったのである。そうと決まれば、あとは勇気と熱意を持って沖縄在住のアジアの方々に協力をお願いすることにした。沖縄には「イチャリバチャーデー」(人は会えば、誰でも兄弟みたいに親しくなれる)という諺もあり、とにかくお会いして話せば心はきつと通じ合うと信じて行動に移した。

どの国の方々も初めてお会いしたにもかかわらず、自国の音楽や伝統芸能をイベントで披露してほしいとお願いしたところ、みんな快く引き受けてくれた。

タイ料理店をこ夫妻で経営しているタイ出身のTさんは、沖縄に嫁ぐ前はタイで舞踊家として活躍されていて、その頃を懐かしむようにリサイタルのボスターや写真を見せてくれた。イベントへの参加のために、昼休みを利用して毎日近くの公民館で猛練習を始めたというメールで知らせてきた。

また、米軍基地のフードコートで働くフィリピンのMさんは、早速フィ

リピン出身の方々を集めて踊りの練習を始めたことだった。そして彼女は、沖縄で生まれ育った娘に祖国フィリピンの魅力を十分に伝えることのできないもどかしさを悔しそうに話してくれた。

それから、自宅で韓国伝統の家庭料理教室を開いている韓国のUさんは、かつては韓国で本格的に伝統楽器を学び、歌手として活躍していたとのことである。沖縄に嫁いで7年、沖縄の自然の美しさに魅せられ、韓国の友人たちに事あるごとに、「沖縄は天国よ」と話したらしい。そんなこともあって、帰郷したら、天国から帰ってきた人、と言われ、大笑いしたそう。

イベントに協力をお願いしたどの国の方々も沖縄への思いを熱く語ってくれ、多忙な時間を何とかやりくりして、音楽や舞踊の練習、衣装の準備から選曲や振り付け、それから打ち合わせにも必ず参加してくれた。イベント当日、会場には400人ものお客さんが詰めかけ、予想以上の関心の高さに驚かされた。そして、各国の出演者のご家族を始め、親戚や地域の方々が大勢かけつけてくれたことに、このイベントが多くの人の心を結んでくれているような気がして嬉しく思った。

イベントが終わって楽屋を訪ねると、それぞれの国の方々が入り混じって写真を撮ったり、握手を交わしたり、それから仕舞いにはみんなで力チャージを踊って喜びを確認しあっていた。

まさに、楽屋で小さな国際交流が始まった瞬間だった。

沖縄に来て8年目というインドネシアの留学生Eさんは、目を輝かせながら「今度はいやりますか?」と訊いてきた。その一言で、私は胸が熱くなり、本当にこのイベントをやったよかったと思った。

今回のイベントは、国際交流って何だろう、観光ってどういうことなんだろう、と改めて考えさせるきっかけをつくってくれた。よく観光は読んで字のごとく、光を観ることだ、という。光とは人それぞれ色々あると思うが、その国のその地域の番光輝いているところに触れることで、自分自身が光輝くことなんだと私は勝手に解釈している。そして、国際交流もその原点は人と人の心と心のふれあいであり、それぞれの文化に素直に共感する感性を共有することのような気がしてならない。

国際交流は足元にあり、私たちの日常から始まる、という思いを強くしながら沖縄に在住するアジアの人々と文化芸能などの具体的な交流をもっと多く行うことで、まずは出会いのきっかけにしたいと思う。そのことが、ひいては沖縄に在住する世界中の国々の人たちのネットワークづくりにもなり、やがてそこに集ったひとりが民間親善大使として羽ばたいて行くことで、沖縄が名実共に、光輝く世界の架け橋となることに希望を託したい。